

---

# 赤いワンピース

春野エックス

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

赤いワンピース

### 【Nコード】

N3228C

### 【作者名】

春野エックス

### 【あらすじ】

小山雄介は大学時代からの友人吉田孝雄を自宅のアパートで待っていた。しかしそこに現れたのは……。流血シーンの無いホラーに挑戦してみました。かなり怖い作品に仕上がったと自負しています。やや複雑なトリックもあって、謎解きもストーリーに絡んで来ます。どうぞお楽しみ下さい。

小山雄介は大学時代からの悪友、吉田孝雄を自宅の安アパートで待っていた。二階建てアパートの一階、向かって右端に彼の自宅は有る。

駅から徒歩十分の利便性は有るが、何しろ古い。築五十年にはなろうかという代物で、家賃が安いのが取り柄である。

たまに彼の家に訪ねて来る女の子達は、何故だか酷く驚いたような顔をして、大抵玄関先で急用を思い出し、慌てふためいて帰ってしまう。多分余りにボロ家なので嫌気が差しての事だろうと推測していたが、それでも雄介は平気だった。

「ふん、俺は短気な女は嫌いさ」

そう言つては余り持てない者同士、吉田孝雄と飲んだくれてうさを晴らすのである。結構それが楽しいのだ。今夜も孝雄が来る事になつている。

六月の雨はしつこい。一週間ほど前から断続的に降っている雨は今も続いている。今日は風も無くただしとすと降っていた。気温は例年より低く湿度の高い割には過ごし易い夜になった。

畳敷きの部屋で折畳み式のテーブルを部屋の中央に置き、酒と摘みとカップが二つ。もう準備は出来ている。午後八時、そろそろ来る頃である。

「トン、トン」

ドアにチャイムがあるが故障しているらしく三回に一回位しか鳴らないので、事情を知っている者は必ずドアをノックする。

「はい、開いてるよ。何してるんだ、孝雄！ 入って来いよ」

何時もならノックもろくにしないで入って来るのに、何をもたもたしているのか。ひよっとすれば酒の摘みを大量に買い込んで来て、

ドアのノブを上手く回せないのかも知れない。  
「しょうが無いなあ全く」

雄介は面倒臭そうに立って行ってドアを開けた。

「こ、今晚は」

「えっ、あれ？ 木下さん？」

「ええ、涼子です。お久し振りです」

「そ、それは良いんだけど、病気の方は大丈夫なんですか。入院してたんじゃあ」

木下涼子はやはり同じ大学生時代の友人である。雄介が告白された唯一の女性である。相当の美人だが、彼は自分には彼女が居るかと嘘を言って振ってしまった。彼が振った唯一の女性でもある。

涼子は大学でもトップクラスの成績。雄介はどん底レベル。とても釣合わないと思った。もっとも振った後であれだけの女をどうして振ったのかと猛烈に後悔した。

しかしその後彼女は重い病に冒され、ここからは相当離れた所にある大学病院に入院している筈である。

「大分良くなったので、一時的に退院が許可されたんです。あのう、雄介さん私と外で少しお話しませんか。ちょっとで良いんですけど、直ぐ帰りますから」

「外ですか？ でも雨が降ってますよ。中の方が良いんじゃないんですか」

「男の人のアパートに二人きりで居るのはちょっと……」

「ああ、それもそうですね。じゃあ傘を持って来ますから、ちょっと待って下さい」

傘は折畳み式の奴が一本だけ部屋の中のバックに入っている。傘を持って三十秒も掛らずに玄関に戻って来た。しかし涼子の姿が無い。

「おお、我が友よ。傘を持ってお出迎えとは感心、感心」

雨に濡れつつも酒と滴みの袋を提げて陽気に孝雄がやって来た。孝雄は余程強い雨でもない限り傘を差して来ない。通常の兩位では、必ずと言って良いほど傘を忘れてしまふからである。

「あれ、涼子はどうした？」

「涼子？ ああ、木下涼子氏か。可哀想にのう。大学病院に入院して早三年。病状はますます悪化していると聞き及んでおるぞ。その涼子がどうかしたか」

「いや、さつきそこに来たんだけどね」

「あははは、夢でも見たのであろう？ 今村の早紀ちゃんから二、三日前に聞いたところによれば、もう立って歩く事も出来ない状態だそうだ。気の毒じゃが美人薄命を地で行ってしまったのじゃなあ。惜しいのう」

「ええっ！ そんな筈は……」

言われてみれば不審な点がある。車の音がしなかったので歩いて来た筈である。傘は持っていなかった。その割にはさほど濡れていなかった様な気がする。半袖の白っぽいワンピースを着ていたと思うが雨に濡れた形跡は殆ど無かった。

「何をごちゃごちゃ言っておるのじゃ、入るぞ」

孝雄の陽気さに押されて涼子の出現の話は有耶無耶になった。それに今夜の彼の様子が何時もと何か違う。

「ああ、そうそう今日は最終の電車で帰るからな。寝ちまつたら、十一時半位には起こしてくれよな。朝、一仕事あるんだよ」

「早番か？」

「ああ、いやいや、田舎の両親が来るんだ、午前中に。それでまあ久し振りに掃除でもしようかと思ってな。一応人間の住める部屋にしておかないと拙いだろ」

「何だ、仕事と言うのは掃除の事か」

「何だは無いだらう。俺にとっては大仕事なんだからな。手伝いに来るか？」

「いや、遠慮しておく。毒蛇が居てもおかしくない環境だからなお前の部屋は。サソリだって居るかも知れないし」

「おいおい、俺の部屋は荒野なのか。……見合いの話を持って来るんだ。いつまでたつても彼女が出来なくて痺れを切らしたらしいよ」  
「へえーっ、本気で受ける気なんだ。らしくない様な気もするけどな」

「俺、本当の事を言うと、涼子にも早紀にも振られたんだよ。特に本命の早紀に振られたのはショックだったな。早紀に言われたんだ、友達でいるか絶交か、二つに一つだってね。そうなったら友達を選ぶしかないだろ」

今村早紀も同じ大学時代の友人である。学部も出身地も違つのが同じサークルに属していた仲間である。

「世界レベル研究会」という名の風変わりなサークルだった。

そのサークルに属するものは世界レベルの特技を持つ事が要求される。ただし誰もやっていない事であっても認定される。

例えば木下涼子は世界の国旗と国名をほぼ完璧に覚えていた。今村早紀は似ている似ていないは兎も角、著名人百人の物真似が出来た。

吉田孝雄は少し幅の広い大きな輪ゴムを、人差し指で一時間以上回す、自称世界記録を持つている。

小山雄介の場合は小さい子に持て持てであるという特技がある。小学生以下の子供と違和感が無いのである。ビービー泣いている子供も彼があやせば大抵ピタリと止まる。

しかし彼自身はこの特技が気に入らない。大人の女性に持て持てだったら良いのに、子供じゃあなあ、と思っているからである。

大学を卒業してからも怪しげな特技を自慢したり、新しく身に付

けた技を披露したりする関係が続いていた。

「でも孝雄、お前は偉いよ。告って振られたんだったら立派だ。俺なんかその勇氣も無い。まあ今日は飲もう。その見合い相手つてのが美人だったら良いな。俺だって鼻が高いよ」

その夜は孝雄の見合いの話で盛り上がった。二人の飲む酒は焼酎に決まっていた。安い奴を十分に薄めて何杯も飲む。冬はお湯割。夏の暑い盛りは氷水割。今時だと冷蔵庫に入れておいたペットボトルの冷水割。

摘みは大量に仕入れたお勤め品が殆ど。本当に食べるかどうか怪しい物まで二人の胃袋にどんどん入っていく。

孝雄はごつごつした身体の割には酒に弱い。今夜は何時もより更に早く十時半少し前には、鼾を掻きながら寝入ってしまった。

起こしてくれと言われていた以上、雄介は眠る訳にはいかない。仕方なくピースを落として、孝雄の鼾と外の雨の音も酒の肴に加えて、チビリチビリとやっていた。

丁度十時半頃だったろう、

「トン、トン」

ドアをノックする音がはっきりと聞こえた。普通この時間の来客は無い。

『やっぱり、……涼子かな』

緊張感を出るだけ抑えて雄介は涼子である可能性について考えてみた。

『早紀の話からすると二、三日前は立って歩けなかった筈。しかしその後急速に、奇跡的に回復する事も無いとは言えないじゃないか』可能性有りと考えた雄介は取り敢えずドアの前まで行った。丁度その時携帯電話の着メロが鳴った。

「鍵なら開いてますから入って来て下さい。ああ、もしも小山です  
が」

「小山君、早紀だけど。涼子、……涼子亡くなったのよ。少し前の  
八時頃。それでね孝雄君にも知らせて欲しいんだけど、そっちに行  
ってる？」

「ああ、来てるけど。そうか、涼子が亡くなったのか。……とにか  
く分ったから。じゃあ今後の事は明日の朝にでも」

「うん、気を落とさないでね。それじゃあ」

『涼子が死んだとすると、ドアの外に居るのは誰なんだ。彼女の筈  
は無いよな。……そうだ名前を聞いてみよう』

心臓がドクン、ドクンと高鳴り始めた。

「あ、あのう、どちらさんですか。ご、御用件は何でしょうか」

おっかなびつくりの間に聞いてみたが、しんとしている。人の気配が  
無い。思い切ってドアを開けてみた。が、当たり前の様にそこには  
誰も居ない。ただ静かに細かい雨が降っているばかりだ。誰も居な  
いと分るとほっとした。

(2)

「変だなーっ、はあーっ、飲み直すか。孝雄には起こしてからで良いな。涼子が死んだなんて信じたくは無いけどな」

「トン、トン」

雄介が戻り掛けた時、またもやノックの音がした。

「誰ですかっ！」

さすがに今度は怒りの口調で言った。誰かの悪戯だと思ったからだ。

「あのう涼子です。お話があります。外に出て来てくれませんか」

「悪い冗談は止めて下さい。涼子って私の知ってる木下涼子さんですか」

「勿論です。悪い冗談なんかじゃ有りません。ただ私は病気なので手に力が入らなくてドアのノブが回せないんです。お願いです、ドアを開けて外に……」

「分かりました。ドアを開けます」

雄介の足が震えた。呼吸を一つ大きくしてからドアのノブに手を掛けると、ゆっくりゆっくり回した。

『死んでいる筈の涼子がどうしてここに居るんだ。ま、まさか、まさか……』

静かにドアを開けると、そこには青白い顔をした涼子が立っていた。ずぶ濡れでしかも裸足である。涼子が死んだという情報は何かの間違いだと思っただ。何かの都合で病院を抜け出して来たのだと信じようとした。

## 赤いワンピース

「涼子さん、か、風引いちゃいますよ。さあ、中に入って」

「だ、駄目です。入れないんです。外に出て来て下さい！」

涼子は雄介の右腕を両手で掴んでぐいと引いた。とても病人とは思えない凄い力だったが、両足と左手で踏ん張って必死になって涼子の両手を振り解き、ドアを閉め鍵も掛けた。

「き、木下涼子は、ご、午後八時頃死んでるんですよ。貴方は誰なんでしょうか！」

「貴方が好きです！ 貴方が好きです！ 貴方が好きです！ 貴方と一緒になければ死んでも死に切れません。さあ！ 一緒に黄泉よみの国へ行きましょう！」

「トン、トン」

「嫌だ、俺は行きたくない！」

「トン、トン」

「帰れ、俺は行かない！」

「ドン、ドン、ドン」

「帰れ！ 帰れ！」

「ガン、ガン、ガン、ガン」

ドアのノックの音は次第に激しさを増し、壊されてしまうのは時間の問題のように思われた。

「嫌だ、嫌だ、俺はまだ死にたくない。……待てよ孝雄にドアを開けさせれば、ひよつとすれば俺は助かるかも知れない。ゆ、許せ孝雄！」

雄介は慌てて孝雄を起こした。まだ少し時間は早かったが今はそれどころではない。

「ああ、もう時間か、ふあーっ！ 良く寝た。じゃあ俺は行くからな。どうした、顔色が悪いぞ」

「ちよつと飲み過ぎたかもな。あれ？ ノックが止まった。何故だ、……ああ、そうか！」

雄介は涼子の現れるタイミングを必死になって考えてみた。一つの共通点に気が付いた。自分が一人きりの時に限って現れるのであ

る。

「おい、ノックがどうした。まあいつか。じゃあね」

「明日は何かと大変らしいな。えーと、ちよ、ちよっと用事があるから駅まで送るよ」

「へえーっ、珍しい事も有るもんだな。そんな事をする、降つてる雨も止んじやうぞっと、本当に晴れてるぞ。こりや事件だのう」

ここ暫く続いていた雨が漸く峠を越えたらしい。雲の切れ間からポツリポツリと星が見える。駅までの道々雄介は木下涼子の死を孝雄に伝えた。

だがその涼子の亡霊らしき者の存在については語らなかつた。喉まで出掛かつたが言えずに別れた。いつに無く寂しい別れとなつた。

『とにかく誰かと一緒に居れば良い。何処に行けば良い？』

暫く駅の周辺でうろろしながらどうしたものかと考え続けた。

そうしている内に日付は変わったが、夜明けまで持堪えれば何とかなりそうな気がした。

駅の周辺では風変わりな格好をした連中がうじゃうじゃ居て結構賑やかだつた。

『こいつ等は朝まで居るんじゃないか。だとすればここいらでぶらついていれば、少なくとも一人になる事は無い。よし、そうしよう』  
方針は決まつた。しかしそれから十分もしない内に、その連中はぞろぞろと帰り始めた。一人になるのが恐ろしかったので、一番人数の多そうな一団の後をつけた。

だがその連中は何台かの車に分乗してあつと言う間に走り去つてしまつた。慌てて他の一団の後もつけてみたが、皆同様に車で走り去つた。

気が付くと彼の周りには殆ど人が居なかつた。僅かな救いは道路を車がびゅんびゅん走っている事である。ところがそれから幾等も経たない内に車の台数までもが急激に少なくなつていった。

『一体何なんだ。俺をどうしても一人にする積りなのか！ 木下涼子の霊なんか怖くは無いぞ。来るなら来い！』

雄介は泣き出しそうになる気持ちを必死で抑えていた。歩道を行ったり来たりしながら時々しか通らなくなった車をずっと目で追ってみたり、不測の事態に備えて四方八方に気を配ったりしていた。

辺りが静かになると遙か遠くで鳴っている救急車やパトカーの音が一層不安を掻き立てる。

『何か大事件でもあったのか？ やけに鳴ってるな。……く、くそう負けるものか！』

夜明けまでは後、数時間。他の場所に行く気力も無いまま、ただひたすら歩道の行き来を続けていた。

それから暫くして「キーツ！」とブレーキ音を響かせて一台の乗用車はかなり先の方に止まって、その後ゆるゆるとバックして来た。た。

助手席の方の窓を開けて顔を覗かせ、

「雄介君！ こんな所で何してるの。ああ、私、早紀よ、今村早紀。分るわよね。今大学病院の方に行く積りなんだけど一緒に乗ってかない？」

朝になってからって思ったんだけど居ても立っても居られなくて、貴方のアパートにも寄ったんだけど留守だったし、あちこち探したのよ。こんな所に居るなんて思いもしなかったから、随分時間が掛っちゃった。さあ、乗って」

「ああ、分った。い、色々あってね、ちょっと散歩してたんだよ。ね、眠れなくてね」

口から出任せを言いながら、

『ああ、これで暫くは持つ。病院に着いてからだって何があるか分りやしないけど、車の中なら安全だ。少なくとも一人じゃないんだからな』

雄介はほつとして助手席に乗り込んだ。車が走り出した途端に喉がカラカラである事に気が付いた。

「何か飲み物は無いか。妙に喉が渴いちゃってね」

「ああ、後ろの座席にポットが置いてあるから。ホットコーヒーなんだけど良いかな。蒸し暑い時にあれなんだけど、私アイスコーヒーって苦手なのよ」

「うん、分った。今日はそれ程暑くないから、ホットで十分だよ。

……ああ、美味しい。生き返ったあ、ふう」

少しの間沈黙が続いたが、

「ふふふふっ！」

いきなり早紀が笑い出した。

「んっ、何が可笑しいんだ？」

「うふふふっ！」

「どうしたんだ？」

「やっと二人きりになれたわ」

「そりゃ二人きりに違いないけど、そんなに可笑しいか？」

「まだ気が付かないの？ これから私が言う事を冷静によく聞いてね。雄介さんは、今村早紀と吉田孝雄の二人に完全に騙されてたのよ。木下涼子が死んだなんて真っ赤な嘘なのよ！」

「えっ！ さ、早紀、何を言ってるんだお前は！」

「私は早紀じゃない！ 木下涼子よ！」

「えっ、な、何だって！」

雄介には何かなんだか訳が分からなくなった。

「落ち着いてよく聞いて。今回の私の幽霊騒ぎは全て早紀のシナリオなのよ。早紀は貴方が好きなのよ、私もだけど」

「早紀が俺を好きだって？ ま、まさか」

「本当よ。貴方の前ではそういう素振りは見せなかったけど、貴方

の居ない所ではそりや凄かつたんだから。私と火花を散らしてたのよね。

でも私は病気になった。しかも治療方法の無い病。今は小康状態を保っているけど、後何年生きられるのか何の保証も無いの。

ところがこの病気に掛った人のうち三割位の人は自然治癒するのよ。それが早紀の悩みの種だった。そこで幽霊騒ぎを作り出して私のイメージダウンを謀ったっていう訳。万一私が元気になっても大丈夫なようにね」

「し、しかし、本当に君は涼子なのか。それにさつき俺のアパートで見たのは確かに涼子だったと思うんだけど」

「私が木下涼子である事の証明は簡単よ。私は国旗に詳しい。こんな事自分で言うのも何なんだけど国旗つてとても覚え難いものなのよ。試にやってみましょうか？」

半信半疑の雄介は聞いてみる事にした。

「そうだな、疑う様で悪いんだけど、少し言ってみてくれないか」「分ったわ。そうねえ、例えばアイルランド共和国は三色の縦縞で左から緑、白、オレンジ。この順序が逆なのがコートジボール共和国。」

それから殆どの国の旗が横長の長方形なのに対して唯一ネパール王国の国旗だけが違うの。左下が直角になっている二つの直角三角形を一部分重ね合わせたような形で、紺色の縁取りがあつて地の色は赤。白色で下の方に太陽、上に月を表す独特なイラストが描かれているわ。

それとこれも一つきりなんだけど正方形の旗はバチカン市国よ。左半分が黄色で右が白。白の方に鍵と冠のとても複雑な紋章が描かれている。Rの文字が真中に大きく描かれていて、赤、黄、緑の三色旗はルワンダ共和国で……」

「も、もう良いよ。良く分ったから。だけど孝雄と早紀の計画がどうして分ったんだ。普通は考えられないけど」

「そこなのよ。あの二人はよりにもよって私の病室で今回のシナリオを話し合ってたの。私が寝た振りをしていたとも知らずにね」

「それって普通は拙いんじゃないのか、有り得ないと思うんだけどね」

理解し難い顔になって運転中の涼子の横顔を見詰めた。

「ええ、確かにそうね。これは私の推測なんだけど、早紀は孝雄と二人きりになりたくなかったんだと思う、貴方との事があるから。」

私が病気で寝ていたとしても三人なら安心だったんじゃないかしら」

「ふーん、孝雄のアパートじゃ彼も男だからね、狼になるかも知れないって訳か。成る程、それで？」

「雄介さんは早紀が物真似が得意な事は知っているでしょう？」

「ああ、勿論良く知ってる。レパトリーの広さだけは凄いやね」

「私と早紀とは背格好が同じ位だし、声質も似ているわ。貴方と出会う前の私達は遊び半分にお互いの物真似をし合っていた事があったの。」

ただ、顔は全然違うわね。でも暗い所だったら服装と髪型とお化粧とで何とか誤魔化せる。だから早紀は貴方のアパートには入ろうとしなかったのよ。明るい室内ではばれちゃうから」

「ああーっ、そうだったんだ。だから絶対に部屋に入ろうとしなかったのか！」

次第に事情が飲み込めて来た。しかしまだ幾つかの疑問点がある。

「だけど涼子さんが死んだ事が嘘だと分ったら、返って逆効果になるんじゃないのか」

「その辺は抜かり無いわね。同じ病棟で亡くなった人が居たのよ。そのチャンスを待っていたの。朝になったらあれは人違いだったって電話する予定なのよ。」

そうすれば私の幽霊だけが事実として残る。恐怖に怯える雄介さんは私の病気が治ったとしても、私と付き合う事は無い。これが彼女の戦略なのよ」

「雨はどうなんだ。雨が降ってないと拙いんじゃないのか。それとも晴れの日は別のシナリオなのか」

「夜に雨が降る確率が高い事と女性患者の死と病棟が同じである事。この三つが重なる日を去年の秋位からじっと待っていたのよ。」

それが昨日の夜だった訳。本当に死んだのは昨日の朝八時。同じ病棟の女性で二十五才。私より一個下ね。病名も同じだし名前は木内亮子。待った甲斐があつて名前まで似てる。これなら間違いだつたって立派に通用するわ」

「だけど待つていたからといってそう都合良く死ぬかな」

「月に一人や二人は確実に死ぬのよ。ベットが開けば直ぐ順番待ちの患者さんが送り込まれて来る。この病気は若い女性に多いの。その気になれば去年の内にもやれたと思う。多分万全を期したんだと思つわ」

「じゃあ孝雄の見合いの話は……」

辛そうに聞いた。

「完全な作り話よ。孝雄は早紀にベタ惚れで、彼女の言う事なら何でも聞くのよ。でもちよつとした手違いがあつたわね」

「手違い？」

「薬が効き過ぎて貴方が孝雄を駅まで送つて行った事よ。早紀のシナリオではアパートに一人残された貴方は、一晚中木下涼子の霊に悩まされる筈だった。」

勿論孝雄と組んであれやこれやと悪戯する積りだったのよ。ところが貴方は、多分そうだと思うんだけど一人だけになるのが怖くな

って駅に行ってしまった。違うかな？」

「うん、その通りだ。弱いよね俺も、ちょっと情けないな、うーん、あれ？」

雄介は眠気を感じ始めていた。

「そんな事は無いわ。まさか親友が裏切って自分を罠に掛けるなんて誰も思わないもの。雄介さんが駄目なんじゃなくって、駄目なのはあいつ等の方よ」

「ははは、フォローしてくれて有難う。ちょっと嬉しいな」

「うふふつ、雄介さんとお話しているとやっぱり楽しい。……それでさっきの話の続きなんだけど、仕方無しに電車に乗って孝雄は自宅に戻ったみたいよ。恐らく早紀の指令だと思う。でも目的は十分に達成されたと思ってるでしょうね」

「念の為に聞くけど、俺が傘を取りに行っている間に、涼子に化けた早紀と孝雄が入れ替わりに出て来たけど、あれも演出なのか？」

「勿論よ。孝雄がね私の病室で言ってたわ。雄介なら間違いなく傘を取りに行くから、その間に交代すれば良いってね」

「じゃあ、後になっずぶ濡れで出て来たのも予め決めていたのか？」

「うん。私はレンタカーで早めに来て手頃な位置から一部始終を全部見ていたの。二人はワゴン車で近くまで来て、運転は早紀だったんだけど、そこを基地にして色々とやっていたわ。」

ずぶ濡れのシーンは面白かったわよ。ポリタンクの水を頭からかぶって、本当にぐしょぐしょに濡れた状態で貴方の所に行ったんだから」

涼子は何とも楽しそうに言った。

「あははは、良くそこまでやるもんだね、呆れた。……ついでに聞くんだけど、駅前にたむろしている連中が急に帰ってしまったたり、車通りが急に少なくなってしまったのは何故なんだろう」

「駅前に居る人達が急に帰ってしまった理由はちょっと分らないわね。でも車通りが急に少なくなった理由は事故のせいね」  
「事故？」

「そうよ、上りと下りの両方で大きな事故があったのよ。おかげで渋滞に巻き込まれて大変だった。どお、これ位ですつきりしたかしら？」

「大体は分った。最後に一つだけ。涼子さんどうして君は今ここに居るんだ。ああ、その前に俺の何処が良いんだ。何の取り柄も無いと思うけど。孝雄と同様フリーターだし。住んでる所はあばら家だしさ、ああ、ううむ、おかしいな……」

眠気は更に増して来ていた。

「そんなに自分を卑下する事は無いわ。私達は奇跡を見せて貰った。二、三才位の聞き分けの悪そうな男の子がワンワン泣いていたのを、お母さんでさえ持て余していたのに貴方は一言で黙らせた。

叱ったり怒鳴ったりした訳じゃないのに、穏やかな一言でピタツと止まった。それも二度も三度もよね。信じられなかった。あれはどういう風にしたの？」

「ああ、いや、特別な事は何も。ただ泣いている理由を聞いただけですよ。』どうして泣いてるの？』ってね。そしたら何かびっくりして泣き止んじゃったんだよ」

「えーっ！ 私達だって同じ様に聞いてるわよ。何が違うのかしら」  
「ひょっとして涼子さんは泣き止ませようと思って聞いていませんか」

「勿論よ。それが普通でしょう」  
「俺はそうじゃない。純粹に理由を聞いているだけです。例えば歯が痛くて泣いているのに泣き止ませよう、とされたら辛いだけでしょう。かえって泣くでしょう？」

「ああ、成る程、簡単な事に気が付かなかったわ。やっぱり雄介さんは凄いわ。それでねそういう貴方を私や早紀や他の女性達が尊敬

していたのよ。その尊敬の気持ちが無時の間にか恋の心になったのよね」

思い出し、感慨に耽<sup>ひた</sup>りながら噛み締めるように言った。

「ふーん、俺は大した事じゃないと思っていただけ、随分高く評価してくれてたんだな。全然知らなかった。でもそれだけじゃ食って行けないんだよね。」

俺が涼子さんを振ったのは、貴方に不満が有る訳じゃなくて、俺自身に不満が有る。……せめて定職にでも就いていれば良かったんだけど、当分無理そうだしね、うつむ、眠い」

遙か向うの方はかなり大きな交差点を認めた涼子はしばし沈黙した後、

「私ね、もう二十六才になったの」

先程までの少しうきうきした雰囲気とはガラリと変わって沈痛な面持ちで語り始めた。

「普通の人ならただの通過点。私にとっては、……絶望の通過点」

「ぜ、絶望？」

「そうよ、さっき言ったわよね、自然治癒の確率は三割つて。そう医者から聞かされてた。でも私はインターネットで調べたのよ。」

英語で書かれた海外の文献に詳しく載っていたわ。英語が出来なければ良かった……。資料を読んでいる内に恐ろしい事に気が付いたの。

三割というのは二十四、五才位までの事で、それ以降はゼロ。若くして全員が亡くなっているのよ。……例外が一件も無いんだって」

「えっ！ それは……」

雄介は言葉を失った。

「ははは、可笑しいわよね。たった三割に必死にしがみ付いて来たのに、それが幻だったなんて、もう笑うしかないわ」

「辛いなんて生易しいものじゃないね。……ひよっとすればそれでこんな事を？」

言いながら雄介は車を止めさせようとしたが、異常なほど眠くて身体が思うように動かない。

「そう、無断で大学病院を抜け出して来たわ。事実を知ったのは去年の末頃。それ以前は貴方に早紀達の計画を知らせようかどうか迷ってた。

でも生き延びる可能性が無いつて知ってからは、便乗させて貰う事にしたの。入念に計画して待っていたのよ。貴方と二人きりで最初で最後のドライブが出来るようにね」

「涼子さん、ひよっとして睡眠薬を……」

「うふふふ、どうやら薬が効いてきたみたいね。私も飲ませて貰おうかしら」

車は真近に迫った大きな交差点を左折して暗い岸壁の方へ向かった。一旦停止し涼子は睡眠薬入りのコーヒーを存分に飲み、再び運転を始めて眠っている雄介に語り続けた。

「ごめんなさい雄介さん。私は弱いよ。テレビドラマに時々出て来る人達みたいに、死を目前にして立派に生きて、潔く死んで行くなんて出来そうも無い。……怖くて、怖くて、堪らないのよ」

涙がぼろぼろ零れたが拭きもしないで運転を続ける。

「でもたった一つだけ、少しはましに死んで行ける方法が見つかったわ。……雄介さんと一緒に死んで行く事。それだったら怖くない。

……最低の女よね。でもどうする事も出来ない。もう一度強い発作が起きたら、もうそれでお終いだって分るもの。……あーっ！

星が綺麗だわーっ！……雄介さん！……行くわよ！」

車は凄いいスピードで岸壁から海へ落ちて行った。

三年後、今村早紀と吉田孝雄は結婚し旅客機で新婚旅行先のハワイへ向かっていた。

「さあーっ、孝ちゃん。ハワイに着いたら子作りに励むわよ！」  
「どっ！」

近くの席の人達が一斉に笑った。

「は、恥ずかしいから止めてくれよ！」  
孝雄は真っ赤になった。

「だって本当の事じゃない。もう夫婦なんだし誰に遠慮がいるもんですか」

「だ、だからさ、もうちょっと小さな声で言ってくると、良いんだけどなあ」

「ああ、そう、それならそうと早く言ってよね。………だけどさ、雄介の保育師さん振り見てみたいよね」

「何も今雄介の話をしなくても。いっつも、雄介、雄介、なんだからな………」

「あれ、何か言った？」

「いや、な、何も」

「宜しい。だけどさあんたも本当に偉いよ。あの時良く涼子が後を付けていた事に気が付いたわね」

「まあ、美人は直ぐ分るんだよ」

「何だって」

「いや、そ、その最初は早紀だって思ったんだ。美、美人だったからね」

「うんうん、それなら納得」

「ところが早紀はワゴン車の中で次の扮装をしている筈だよ。そういう計画だったんだから」

「その通り」

「それで俺としては頭脳をフル回転させて、それが涼子だって見破ったんだ」

「あんたのそこまでの人生で一番頭を使ったんじゃないの？」

「そ、そこまで言うかな普通、自分の夫を捕まえて。まあその通りなんだけどさ。後ろめたかったんだよ、雄介を騙すのって気が重くてね。それで逆に必死になったんだよ。親友の一大事かもしれないし、實際死に掛けたんだからね」

少し顔をしかめて言った。

「あら、結構楽しそうにやってたと思うけど。私とキスが出来て張り切ってた筈よ」

「そりゃ好きな女とキスが出来りゃ張り切るさ。でも俺の為じゃなくってお前が雄介に好かれる為なんだよな。複雑な気持ちだったよ」

「ふーん、あんたにもそんなデリケートな所があったんだ。……それで駅に着いてからどうしたんだっけ？」

「雄介の後を付けて行くのかと思っただら俺の後を付けて来たんだよね。しょうがないから電車に乗ったよ。で、発車する寸前に何気なく階段の辺りを見たら、早紀の扮装をした涼子の後姿が見えたんだ。慌てて降りて今度は逆に俺が涼子の後を付けた。気付かれない様にするのは大変だったんだぞ」

「それですっかり痩せたのねって、ますます太ったわね」

「俺の場合は神経をすり減らすと太るんだよ。体質なんだからしょうがないよ」

「はい、はい、それでどうしたの」

「涼子はレンタカーで何処かへ行ってしまった。多分この世の名残に思い出のある場所を何ヶ所か回っていたんだと思う。その時お前がワゴン車で待っていてくれれば良かったのに帰っちゃったんだよね」

今度はウンザリした顔で言った。

「しょうがないでしょう。あんたがワゴン車の中に携帯電話を忘れちゃって、連絡が取れなかったんだから。眠くなって来たから家に帰って寝ちゃったんだもの」

「あーあ、俺が必死になって動き回っている時に、のほほんと寝てるんだものな」

「へいへい、悪う御座いました。十分に反省して、貴方と結婚したので御座いますよ」

「まあ、その位はして貰わないとね」

「それからどうしたの？」

「涼子の後を付けるべきかどうか迷ったんだけど、雄介の様子が変わったから再び駅へ戻って、今度は彼の後を付ける事にしたんだ。」

後は前にも話した通り涼子と雄介の乗った車を、タクシーの運転手に、ひよつとすれば心中するかも知れないって話して、気付かない様に尾行して貰った。

あれだっただけだ。幸いレンタカーだったから特徴があつて尾行し易かったんだけど、それでも後一、二分遅かったら、左折した事に気が付かずにアウトだったな。

そうこうしている内に案の定、海へドボンだ。通報が早かったから二人とも一応助かったけど、可哀想に涼子は発作を起こして死んじゃったよね」

「そうよね。涼子が百パーセント死ぬって分つたら、あんな事しなかったのに。雄介さんに顔向け出来なくなっちゃった。涼子にももっと優しくしてやれば良かったって凄く後悔してるの」

「ああ、そうそう。前には言わなかったんだけど、あの時おかしな事があつたんだよ」

「おかしな事？」

早紀は怪訝な顔で孝雄を見詰めた。

「うん。駅前で夜中にうろろしている連中の中に俺の知り合いが

いるんだよ。そいつにどうしてあの晩早く帰ったんだって聞いてみたんだ。たまに警察の手入れがあるんだけどね」

「何の取締り？」

「主に覚せい剤の売買の取締りかな。それがらみかかって思ったんだけど違うんだよね」

「雨でも降って来たんじゃないの？」

「いや、あの晩は俺が雄介と一緒に駅へ向かった時からずっと晴れてたよ」

「じゃあ、何なの。それによくそんな前の事を覚えていたわね、あんなその日暮みたいな連中が」

「あの晩の事は一生忘れないって言ってたな」

「な、な、何それ」

今度は早紀が顔をしかめながら聞いた。嫌な予感がある。

「どうしても帰りたくなかったんだってさ。誰かに恐ろしい目で見られているみたいで、とても居られなかったんだそうだ」

「だ、誰かについて、誰によ」

「他の連中も同じ事を言ってるらしいんだけど、半袖の赤いワンピースを着た髪の長い若い女性だそうだよ。ふわふわと宙に浮いていて物凄い目で睨むんだそうだ。」

ただここが微妙な所なんだけど、本当に見たと言うよりもそんなイメージがあった、という事らしいんだよね」

「なーんだ、イメージじゃ当てにならないわね。びっくりさせないでよ。そんな事位で帰っちゃうなんて皆臆病だわね」

「ところがだよ、もう一つ不可解な謎があるんだよ」

「まだある訳？」

今度は幾分しらせ気味に聞いた。大したことじゃないと思ったのだ。

「あの晩二つの大きな事故があったのは知ってるよね」

「うん、ほぼ同時刻にトラックの横転事故があったのよね。たしかどっちも居眠り運転だったと記憶してるけど」

「そうそう。この間のテレビの特番でその事故も取り上げられていたんだけど、見た？」

「見てないわね。私はドラマ専門だから、そういうのってあんまり興味無いのよ」

「俺も特に興味があった訳じゃないんだけど、あの時の事故の話らしかつたんで取り敢えず見てみたんだよ。そしたらね世にも不思議な事故だったんだ」

「世にも不思議って、事故は事故でしょう？ そんなに不思議な事なんてある訳無いじゃない」

「ところがあつたんだよ。たまたま両方の事故とも、一部始終をビデオカメラで撮っていた人がいてね、リアルタイムで時刻が画面に映ってたんだ。そしたら」

「そしたら？」

「一分一秒も狂い無く全く同じ時刻に事故が起きてるんだよ」

「えっ！ ぐ、偶然よ。偶然に決まってるわ！」

早紀は真っ青になって否定した。話をそれとなく聞いていた近くの席の人達も、内心穏やかではない。孝雄は早紀の言葉を半ば無視して話を続けた。

「トラックの運転手は二人とも大怪我をしたけど、命に別状は無くてその時の様子を聞く事が出来た。二人とも同じことを言っただ。半袖の赤いワンピースを着た髪の長い若い女性が、ふわふわと宙に浮いている様に見えたんだそうだ。そして物凄い目で……」

「キヤーーツ！ や、止めて！ もういい、もうその話は止めてよ！」

「わ、分った。もう終りにしよう」

孝雄は内心ニヤリとしていた。早紀の弱点を捕まえた、と確信が持てたからである。もっとも早紀の激しい反応は、雄介を必要以上

に追い詰めてしまった罪の意識から来たもので、聞き耳を立てていた近くの席の人達にとっては、ちよつと怖い話位にしか感じられなかった。

ハワイに滞在中は予定通り二人は子作りに励んだ。一週間はあつと言う間に過ぎ、今は帰りの旅客機の中。その二人は気になる視線を感じていた。

「ねえ、向うの方に座っている白っぽいカーディガンを着ている若い女の人、時々こつちを見ている様な気がするんだけど、気のせいかな」

「いや、俺も見られている様な気がするんだけどな。でも見覚えが無いな」

「うーん、私ねどつかで見た様な気がするんだけど、思い出せないわね」

結局誰なのか分らないままその視線は無視して、話題はまたもや幽霊騒ぎの事になった。

「俺さ一つ二つ確かめておきたい事があるんだよな」

「改まつて、何？」

「一つ分らないのは、何も幽霊騒ぎなんぞ演出しなくても、お前が雄介に直接アタックすれば良かったんじゃないのか？ 自信が無かつたのか？」

「うつ、い、痛いところ突いて来るわね。その通りよ、自信が無かつた。もし涼子が病から復活して来たら、それだけでも英雄みたいなものでしょう？ その上美人で頭が良いし、何より雄介が彼女の事好きだつて分つてた」

「えっ、雄介が？ でも釣合いが取れないって言つてたと思うがな」

「はあ、鈍いわね。あの二人の壁は釣合いが取れない事だけだったのよ。仲良かったでしょうあの二人」

「ま、まあな」

「その壁は退院する事によって消滅するのに違いないって思った。そしたら私が出る幕は無い。人生真っ暗だわ」

「俺が明るくしてるだろう?」

「今の話じゃなくて、その時の話よ。それで何とかしようと思いついたのが彼女の幽霊騒ぎよ。上手く行ったと思っただのに彼女に筒抜けだった。でも変なのよね。どうして彼女の病室で相談したのかしら?」

「そうそう、それは是非聞きたい」

「あんたが言い出したんじやなかった？」

「あれ？ 早紀の方から言い出したんだろうか？」

「ええっ！ あんたから言い出したんじゃないの！」

「俺は言っていないさ。ええ？ 何か変だぞ。」

「私だつて言い出してないわよ。お互いにそう思ってたのかしら」

二人とも首を傾げて暫く考えたが謎は解けなかった。

「おかしいなあ、お互いに相手が言い出したと思ひ込んでるなんてね」

「ひよつとして、私達誰かに操られてるんじゃないのかしら？」

「こ、怖い事言い出すなよ。誰かって誰だよ。み、身に覚えは無いぞ」

「そうよね、そんな事ある訳無いわよね。……確かめておきたい事つてそれだけ？」

「いや、もう一つある。俺が寝たふりをしていて、お前がずぶ濡れで雄介の腕を引つ張った時の事さ。貴方が好きですつて三回も言ったよな。あれつて本気だったろ、違うか？」

「えへへ、分った？ 言いたかったのよ、雄介に思いつきり」

「えへへ、じゃ無いよ。俺はムカツと来てさ、何もかもばらそうかと思つたんだぞ。その後でドンドン、ドンドンつて何度もドアを叩くしさ。雄介が俺を起こすのがもう一分遅かったら、切れてたな」

孝雄は如何にも悔しそうに言った。

「ちよつと待つて。私、彼に、さあ一緒に黄泉の国へ行きましようつて言った後、直ぐワゴン車に戻ったわよ。濡れたままじゃあ風邪引いちゃうから、大急ぎで服を脱いで身体を拭いてた。ドアをドン

ドンなんて叩いてない」

「そんな筈は無いよ。ドアが壊れるんじゃないかって思う位強く叩いたじゃないか」

「ち、違う。第一そんなに叩いたら、ご近所の人が駆け付けて来るでしょう？」

「あ、そうか。じゃあ、誰なんだ？ それにあんなに音がしてどうして誰も来なかったんだらう。あれ？ 変だな……」

二人はまた考え込んでしまった。

思索していると先程からこちらを時々見ている、右端に座っていた若い女性が、暑いのだろうかカーディガンを脱いで二人に向かつて歩いて来た。赤い半袖のワンピースに長い髪である。それに気付いた二人は青くなった。

「半袖の赤いワンピースを着た髪の長い若い女性、そのまんまじゃないの！」

「あ、ううう……」

孝雄はしまったと思った。この種の話は早紀の弱点だった筈。しかし同時に自分の弱点でもあったのだ。何しろ声すら出せないのだから。近くの席の人達も、二人のただならない気配に気付いたのか、緊張感が一気に高まった。

しかしにこやかな顔で、

「あのう、今村さんですよ」

と、その若い女性が早紀に話しかけたので、相当に高まっていた緊張感ほくはスーッと解れて行った。

「はい、そうですけど、貴方は？」

「木内留美です。三年位前に大学病院で亡くなった亮子の妹です。

何度かお会いしてますよね。ああ、あの時はセーラー服だったし、髪も今より大分短かったからかなり印象が違うかもしれませんけど。

それになりがりに痩せてましたから」

「ああー、木内亮子さんの妹さんね。まだ高校生だったわよね。ねえ、孝雄も一度や二度は会ってる筈よ」

「ああ、思い出した。確か高校三年生だったと思うんだけど、今は大学生ですか？」

「いいえ、高校を卒業して直ぐ就職しました。ちよつと不本意だったんだけど父の会社に入ったんです。就職難でなかなか思うような仕事が見つからなくて」

「大卒の人だつてフリーターやってる位ですからね」

早紀は孝雄を見ながら言った。

「お、俺を見る事はねえだろう。……ところでハワイには観光旅行ですか」

「いいえ、父の会社のホノルル支店で研修です。と言うより英語の勉強が主なんですけどね。一応貿易関係の仕事なのである程度出来ないとちよつと。だけど才能が無いみたいです。今後の事を相談する為に一時帰国するんです。出来れば別の仕事に付きたいと思っていまするんですけど」

「へえーしっかりしてるわね。で、どんな仕事に付きたいんですか」

「それはこれから。何か資格を取って定職に付ければ良いなと思っています」

「感心ねーっ、誰かさんとは大違いだわ」

また早紀は孝雄を見ながら言った。

「いちいち俺と比較するなよ。お、俺にだって輪ゴム回しの世界チャンピオンっていうプライドがあるんだからな」

「輪ゴム回しの世界チャンピオンって何ですか？」

「あーっ！ な、何でも無いの。この人の個人的な趣味だから、気にしないで下さい」

「そ、そうですか。……ところで姉が凄く気に入ってたんですけど、

小山雄介さんは今どちらにおられるのでしょうか」

「雄介さん？ 特別に親しかったんですか？」

「いいえ、姉の片思いだったんです。余命幾ばくも無いって分っていたものですから。告白なんかしたら雄介さんにご迷惑が掛ると言っつて、ひたすら耐えていたんです。」

燃え尽きる直前の本当に激しい恋だったと思います。でも余りに思いが強過ぎて、ひよっとすると雄介さんの周りで何かおかしい事でもあったんじゃないかって、ああ、これは私の思い過ごしですね」

孝雄と早紀は思わず顔を見合わせた。雄介を巡る数々の不可解な出来事の元凶は木内亮子だったのではあるまいか。雄介のアパートを訪ねて来た女性達が、何かに怯える様に直ぐ言い訳して帰ってしまったのも、そのせいかも知れない。

「私出来れば、雄介さんにお会いして、姉の思いを多少なりとも伝えたいと思うんです。ご迷惑にならない程度に。そうしないと何だか姉が浮かばれないような気がするんです」

「成る程。雄介はね、自分の田舎に……」

「孝雄！ 余計な事は言わないで頂戴！ 悪いんだけど雄介さんをそつとしておいて欲しいんです。テレビのニュースなんかで取り上げられた事もあるので、知っていると思いますけど、彼は一度死に掛けたんですよ。」

木下涼子という女性に無理心中させられそうになりました。まあ私にも責任の一端はありますけど、その時のショックからやっと立ち直ったばかりなんです。当分の間、遠くから見守っているだけにして頂けませんか」

しかし木内留美の表情は険しいものになった。

「別に知らせて頂かなくても結構です。こちらの方で勝手に調べて私は彼に会いに行きます。せいぜい邪魔だけはしないで下さい」

「な、何ですって。どうしても雄介さんに会いに行くって言うんで

すか！」

「はい、私は姉と約束しました。お姉さんの意思を私が引き継ぐて」

「ば、ばかばかしい。恋ってそんなものじゃないでしょう？ 仕事か何かと勘違いしてるんじゃないんですか！」

早紀は軽蔑的な言い方をした。

「貴方に理解して貰おうとは思っていません。ただ誤解なさらないで下さい。私は姉以上に彼が好きです。大学病院で一目見た時からね。私の彼を好きだという感情は多分人間のそれを超えていると思います。不思議な力に目覚めましたから」

「な、何を言ってるの。不思議な力なんて、あ、あ、ある筈無い」  
段々怖くなって来た。言葉では否定したが、本心では否定し切れなかったのだ。

「警告の意味で私の霊を一度だけ見せて差し上げます。事故を起こしたトラックの運転手やその他の人達が見たものと同じものをね…」

留美の声は次第に不気味なものになっていった。

「や、止めて！ 止めて！」

早紀は涙ぐみながら叫んだが、それは頭の中だけで響いて声にはならなかった。辺りは真っ暗になった。身体は硬直して動かない。瞬きさえ出来ないのだ。ずっと向うの方に赤い布切れの様な物がふわふわと浮かんで見える。

よく見れば半袖の赤いワンピースである。それはどんどん近付いて来て、両手、両足と顔が現われ、人である事が分った。

「ああ、涼子！」

顔は疑いも無く木下涼子だった。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい！」

早紀はひたすら謝った。更に近付いて来ると、

「えっ、木内亮子さん？ す、すみませんでした。本当に申し訳ありませんでした！」

姿形は木内亮子に変わっていた。早紀はやはり謝罪した。もっと近付いて数メートル先まで来るとその姿は木内留美になった。

「お、お前は木内留美！ わ、私をどうする積り！」

留美は物も言わず、ジリツ、ジリツと寄って来る。

「な、何もかもお前がやったのね！」

早紀が強気に叫ぶと、留美はとても人間とは思えないような恐ろしい形相で睨みながら、グリーンと素早く接近して来てそのまま激突した。

「どん！」

大きな音で目が覚めた。全身が痛い。気が付くと通路に倒れていた。

「い、痛い！」

「おい、ど、どうしたんだ。だ、大丈夫か」

慌てて孝雄が助け起こした。

「あいつよ、あいつが犯人よ！」

「あいつって、誰だ」

「だから木内留美よ。犯罪者よ彼女は。トラックの事故を起こさせて二人に大怪我をさせたのよ。れっきとした犯罪よ。あ、あいつは何処へ行った？」

「何を言ってるんだ。ここが何処だか分かるか？」

「何処って、飛行機の中、……あれ？」

「ターミナルだぞここは。飛行機はもう着陸したんだ。何を言っても上の空だったんでおかしいとは思ったけど、途中の記憶が無いの

か？」

「ええっ？ わ、私、……木内留美は何処へ逃げたの？ ああ、さ  
ては雄介に会いに行ったのね！」

「お前、留美さんと話してる途中で寝てしまった事を覚えているか  
？」

「私、寝てなんかいないわ。彼女に霊を見せられて金縛りにあつた  
みたいに動けなくなった。彼女がぶつかって来たと思っただらここに  
倒れてたのよ」

「ふーん。……分った、信じるよ。でも俺の言う事もしつかり聞い  
て欲しい。お前が留美さんと話をしている途中でスーツと寝入って  
しまったんで、代りに俺が話をした。勿論雄介の住所を教えた」

「だ、駄目よそんな事！ 雄介が可哀想だわ！」  
ムキになって叫んだ。

## (6) 最終回

「俺達にそんな事を言う資格は無いんだよ。俺達は雄介に対して酷い事をしたけど、同時に木内亮子さんに対しても酷い事をしてたんだよ。」

彼女が丁度都合の良い日に死にますようにと強く願ってた。法律に触れる事じゃあないかも知れないけど、これって恥ずべき事じゃないのか」

「分ってるわよ。だから私、木内亮子さんには謝ったわよ。涼子にも勿論謝った」

「えっ、それはどういう事だ？二人とも死んでるんだぞ、何を言っているんだ？」

孝雄には早紀の言葉が理解出来なかった。

「さっきの木内留美の霊の事なんだけど、最初は涼子だったの。次に木内亮子さんになって、最後に留美になったのよ。」

涼子にも亮子さんにも本当に本気で謝った。でも木内留美だけは許せない。何の関係も無いトラックの運転手二人に大怪我をさせた罪は、私なんかより遥かに重いわ。絶対に裁かれるべきよ！」

「留美さんが色々な事件の張本人だと言うのか？」

「そうよ、彼女が言ったのよ、トラックの運転手やその他の人達が見たものと同じ霊を見せるってね」

「変だな、それは何時だ？」

やはり早紀の言葉が理解出来なかった。

「何時って飛行機の中で私と彼女が話していた時よ。貴方の目の前でよ。聞いたでしょう？」

「俺は聞いてないぞ。お前は彼女と一言、二言話をしただけで寝ちまったんだぞ。やっぱり覚えてないのか。嘘だと思っただったら近

くの席だった人達を探して聞いてみるか、ちよつと大変だけど」

「私は夢を見ていたの？ いいえあれは夢なんかじゃない。あんな夢があつて堪るもんですか！ 絶対に木内留美が何かをしたのよ。さ、催眠術かもしれないわね」

「ふーん、そうか。……ちよつとだけ良いか？」

埒が明かないと感じた孝雄は自分の考えている事を先に話そうと思つた。

「な、何よ」

「早紀が寝ている間に、俺は留美さんと彼女の着ている赤いワンピースについて、少しばかり話をしたんだ。赤いワンピースが何かと話題になるからね」

「そ、それで」

「彼女が着ているのは、お姉さんの形見なんだそうだよ。でもちゃん到着したのは今回が初めてだそうだよ。彼女がりに痩せてたからね。一度だけ着てみたんだけどサイズが合わなかったらしい。最近漸くふつくらとして来たので本格的に着てみたんだそうだよ」

「ああ、それは良かったわね」

早紀は皮肉たつぷりに言った。孝雄は聞き流して話を続ける。

「あの赤いワンピースはね、木内亮子さんの退院祝いのものであったんだそうだよ」

「退院祝い？」

「うん、一時的に病状がとても良くなって、これなら大丈夫と医者にも言われてたらしい。そこであの赤いワンピースを仕立てて貰つて、留美さんにだけは打ち明けてただけど、それを着て雄介に告白する積りだったらしいよ」

「えっ！ そんな事があつた訳！ けどお金持らし過ぎて嫌味だわね。それにどうして赤いワンピースなのかしらね。白でも緑でも良いんじゃない？」

「ライバルに負けたくなかったからなんだろうね。涼子は何時も白いワンピースだったよね。またそれが良く似合ってた。彼女に勝つ為には、燃えるような赤でなければと思ったんじゃないのかな」  
「孝ちゃんにしては随分気の利いた事を言うわね、『燃えるような赤』なんて」

ちよつと疑った言い方をした。

「まあ、留美さんの、その、受け売りなだけだね」  
「やっぱり。それから？」

「木内亮子さんがその燃えるような赤のワンピースを試着して、留美さんと雄介の話をしている最中に強い発作が来て、次の日の朝彼女は亡くなった。亡くなる前に約束したらしい。留美さんがその赤いワンピースを着て雄介に告白する事をね」

「信じられない！……私の大胆な推理を言っても良いかしら？」

「ああ、良いけどそろそろバスの時間だから乗ってから聞くよ」

二人は大急ぎでリムジンバスに乗りこみ席に座ってからまた話し続けた。

「大胆な推理ってどういう事だ？」

「つまり、……留美が亮子さんを殺したのよ」

「あははは、亮子さんは病気で死んだんだぜ。何とかと言う難しい病気でね」

「本当にそう？ 彼女の病気は治ってたのよ。医者が太鼓判を押したのよ。それがどうして病気で死ぬのよ」

「え、ま、待てよ。あれえ？ そう言われてみると早紀の言う事にも一理あるな」

孝雄は考え込んだ。早紀は自分の説に必ずしも自信があった訳ではない。何か確認する方法が無いかと彼女もまた考え込んだ。

すると目の前に赤いスカートが見えた。見上げると、燃えるよう

な赤のワンピースを着た留美が立っていた。

「はあーっ！　る、る、る、る、留美！」

早紀の顔は引きつった。孝雄はただ呆然としていた。このバスに留美が乗っていない事は確認していた筈である。

「私は姉を殺してはいません。そこまではしないわ。でも早紀さんの推理は半分当たってる。姉が死ねば良いと思ってた。だけど本当に死んでしまって、とても後悔しました。」

だから今まで雄介さんには会いに行けなかった。でも最近漸く姉の形見のこのワンピースが、着れるような体形になって来たので思い切って着てみたの。そしたらあれは夢かも知れないけど、姉が許してくれました。私に雄介さんを譲るって。

私にだって早紀さんの気持ちは良く分かります。でも雄介さんだけは譲れません。邪魔はしないで下さい。私がこのワンピースを着ると、姉の怨念を感じます。

そればかりじゃありません。私が子供の頃から持っている、ささやかだけどちょっと不思議な能力が何千倍にも増幅されて、霊なんというものを人に見せる事が出来るようになったの。

あなた方が今見ているのは私の幻よ。他の人には全く見えないわ。それからトラックの運転手さん達には本当に申し訳ありませんでしたが、あの当時はまだこの力のコントロールが上手く出来なかったんです。

一応二人の運転手さん達には、匿名で謝罪文と幾ばくかのお金を治療費として送らせて頂きました。もしどうしても許せないのでしたら、警察に訴えても結構です。それではさようなら」

留美の姿はスーツと消えて行った。早紀と孝雄はこれ以上留美を追及する事は止めにした。何をどうする事も出来ないし、彼女が決して悪意ばかりの人間ではないと判断出来たからである。

数年後、子育てに忙しい今村家に一通の写真付きの葉書が届いた。

やっと定職についた孝雄は今夜も残業である。早紀が葉書を手に取って見ると、それは小山雄介と木内留美の入籍の知らせだった。

#### 前略

もう何年も会っていないけど元気ですか。俺と留美は夫婦になった。結婚式は無い。彼女は両親の反対を押し切ったので大変だと思っけど、年明け早々には母親になる。

二人とも同じ保育園で働いている。住まいは近くのボロアパート。どうも俺はボロ家に縁があるらしい。過去には色々あったけど全部水に流して、未来に向かっただけの合同パーティーでもやれば良いなあと思っている。

大分先だけど子供の手が掛らなくなったらまた葉書を出すよ。じやあ皆さんに宜しく。尚、写真撮影も印刷も園長の御好意によるものです。ではまた会える日まで、さようなら。

#### 敬具

葉書の上半分位に二人の写真が載っている。雄介の言うボロ家の居間だろう。手前にテーブルがあって、奥の左に雄介、右に留美が並んで座っている。楽しげな二人の写真を見て早紀は相当に嫉妬した。

『……でも雄介さんって何時見ても素敵だわね。過去の事を全部水に流したんだったら、私の事もすっかり許してくれたのよね。……いつその事会いに行こうかしら』

無理矢理忘れようとしていた、雄介への思いが再び燃え盛ろうとしたその時である、

「ああっ！ 駄目よ！ 行けない！」

写真の左端にごく一部分だけ写っているのは、あの燃える様な赤

赤いワンピース

完

のワンピースだった。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3228c/>

---

赤いワンピース

2008年8月29日18時00分発行